1　東京都･大阪市中央卸売市場の需給動向（令和４年９月）

野菜振興部　調査情報部

【要約】

●東京都中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は12万790トン、前年同月比104.4%、価格は１キログラム当たり265円、同93.1%となった。
●大阪市中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は４万113トン、前年同月比106.2%、価格は１キログラム当たり241円、同93.1%となった。
●東京都中央卸売市場における指定野菜14品目の価格のうち、平年を下回ったものは、キャベツ類（平年比74.6％）、はくさい（同76.7％）、なす（同77.5％）、ピーマン（同82.5%）、きゅうり（同96.4%）、ほうれんそう（同98.2%）、平年を上回ったものは、にんじん（平年比175.8%）、だいこん（同139.4%）、たまねぎ（同127.2%）、ばれいしょ（同110.5%）、ねぎ（同110.3%）、トマト（同104.8%）、レタス類（同104.6%）、さといも（同104.5%）、となった。
●ここ数年、11月は重量野菜の価格低迷の印象が強く、全般的に出荷を後ろにずらす意向がみられる。輸入に注力してきた青果卸が国内産地からの仕入れを強化する動きもみられ、市場価格は平年を上回る推移が予想される。

（１）気象概況

上旬は、沿海州から千島付近で高気圧の勢力が強く、北海道は高気圧に覆われて晴れた日が多かったため、北日本日本海側の旬間日照時間はかなり多かった。台風第11号は、８月末から９月上旬前半にかけて沖縄付近で停滞し、大型で非常に強い勢力となって５日から６日にかけて東シナ海を北上した。このため、沖縄･奄美と九州地方、四国地方を中心に、大雨や大荒れとなった所があった。沖縄・奄美では、台風の影響で旬降水量平年比は277%と、1946年の統計開始以降、９月上旬として１位の多雨となり、旬間日照時間はかなり少なかった。旬平均気温は、南から暖かい空気が流れ込みやすかった北・東・西日本で高くなった。旬降水量は、東・西日本日本海側と東・西日本太平洋側で多かった。一方、北日本日本海側と北日本太平洋側で少なかった。旬間日照時間は、東･西日本日本海側と東･西日本太平洋側で少なかった。一方、北日本日本海側でかなり多く、北日本太平洋側で多かった。

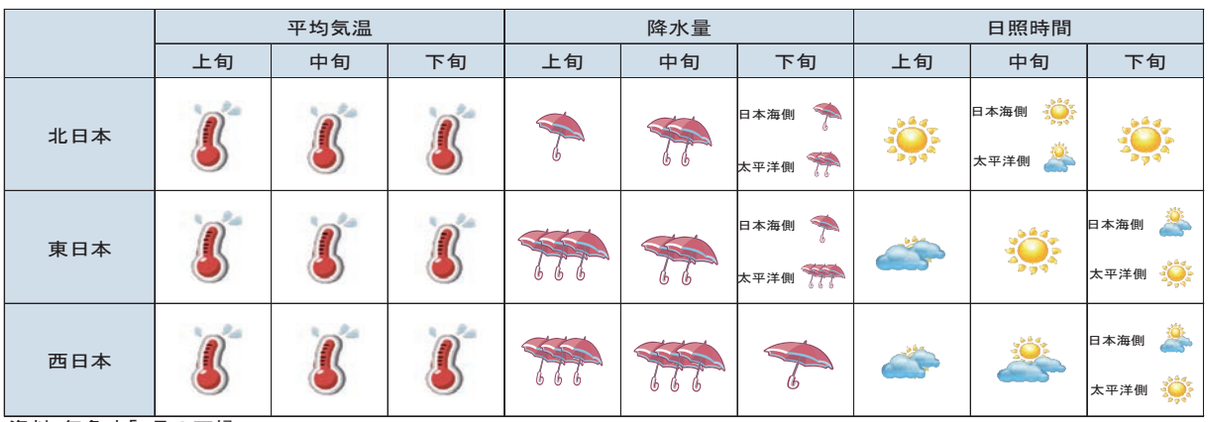
中旬は、台風第14号が18日に鹿児島県に上陸し、台風を要因とする特別警報が発表された。また、19日から20日にかけて山陰から東北地方を通過したため、西日本から東北地方にかけて大雨や大荒れとなった所があった。暖かい空気に覆われやすかったため、旬平均気温は、北・東・西日本でかなり高く、西日本の旬平均気温平年差は＋2.5度と、1946年の統計開始以降、９月中旬として１位の高温を記録した。旬降水量は、沖縄・奄美でかなり多く、西日本日本海側と西日本太平洋側で多かった。北・東日本日本海側と北・東日本太平洋側では平年並だった。旬間日照時間は、北・東日本日本海側と東日本太平洋側で多かった。一方、沖縄・奄美で少なかった。西日本日本海側と北・西日本太平洋側では平年並だった。

下旬は、北日本では、24日に前線が通過した影響でまとまった雨となったほかは、高気圧に覆われて晴れた日が多かった。23日から24日にかけては、東海道沖を北東進した台風第25号の影響で東日本太平洋側を中心に大雨となり、記録的な大雨となった所もあった。旬平均気温は、旬の中頃以降、全国的に暖かい空気に覆われやすく、晴れて気温が上昇し

た日もあったために高かった。旬平均気温は、全国で高かった。旬降水量は、北・東・西日本日本海側、西日本太平洋側、沖縄・奄美で少なかった。一方、東日本太平洋側で多く、北日本太平洋側では平年並だった。旬間日照時間は、北日本日本海側、北・東・西日本太平洋側、沖縄・奄美で多かった。東・西日本日本海側では平年並だった。

旬別の平均気温、降水量、日照時間は以下の通り（図１）。

図１　気象概況



資料：気象庁「9月の天候」

（２）東京都中央卸売市場

９月の東京都中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は12万790トン、前年同月比104.4%、価格は１キログラム当たり265円、同93.1%となった（表１）。

表１　東京都中央卸売市場の動向（９月速報）

品　目	入荷量 (t)	前年比 (%)	平年比 (%)	価格 (円/kg)	前年比 (%)	平年比 (%)	価格（円/kg）の推移		
							上旬	中旬	下旬
野菜総量	120,790	104.4	97.5	265	93.1	101.2	268	267	261
だいこん	8,023	89.4	80.9	143	131.6	139.4	152	138	140
にんじん	6,215	79.8	84.5	209	188.1	175.8	217	218	192
はくさい	9,708	116.3	97.7	85	56.7	76.7	72	85	96
キャベツ類	17,622	105.4	106.1	73	67.8	74.6	67	68	83
ほうれんそう	884	101.3	105.9	777	96.2	98.2	819	795	726
ねぎ	4,304	102.6	101.1	382	119.1	110.3	388	368	389
レタス類	9,209	129.4	105.6	202	66.9	104.6	184	231	197
きゅうり	7,610	111.7	98.5	284	78.4	96.4	334	257	257
なす	3,241	126.7	109.8	296	70.8	77.5	287	274	340
トマト	6,371	107.9	96.7	470	96.0	104.8	452	448	518
ピーマン	2,737	109.8	117.4	338	80.9	82.5	367	335	311
さといも	669	84.1	87.7	343	105.2	104.5	340	345	344
ばれいしょ	5,822	93.7	82.8	142	73.3	110.5	160	140	125
たまねぎ	9,715	99.5	99.9	117	107.2	127.2	119	119	112

資料：東京青果物情報センター「青果物流通月報・旬報」
注１：平年比は過去５カ年平均との比較。
注２：豊洲、大田、豊島、淀橋、葛西、北足立、板橋、世田谷、多摩ニュータウンの９市場のデータである。

根菜類は、にんじんの価格が、不足感から月間を通して堅調な動きとなり、安めに推移した前年を９割近く上回り、平年を７割以上上回った（図２）。

葉茎菜類は、キャベツ類が潤沢な入荷から価格の動きが鈍く、下旬に向けやや上昇したものの、高めに推移した前年を３割以上下回り、平年を２割以上下回った（図３）。

果菜類は、なすの価格が関東産のピークを過ぎて減少に向かう月後半に上昇したものの、高めに推移した前年を３割近く下回り、平年を２割以上下回った（図４）。

土物類は、たまねぎの価格が１カ月を通して堅調な動きが続き、やや高めに推移した前年をかなりの程度上回り、平年を３割近く上回った（図５）。

なお、品目別の詳細については表２の通り。

図２　にんじんの入荷量と卸売価格の推移

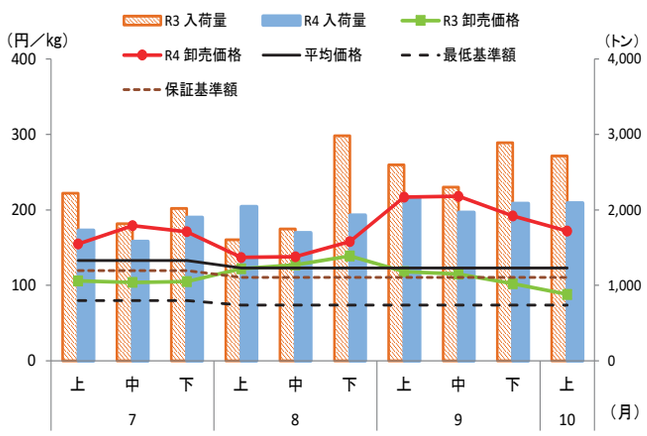


図３　キャベツ類の入荷量と卸売価格の推移

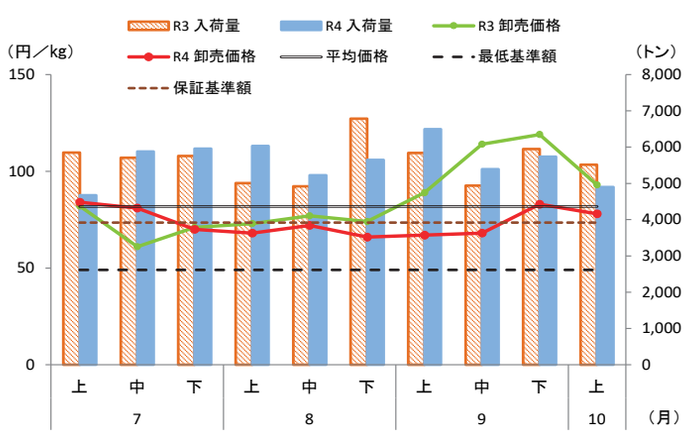


図４　なすの入荷量と卸売価格の推移

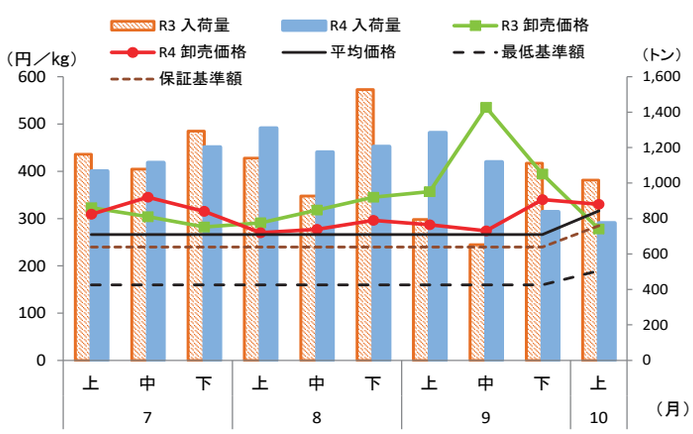
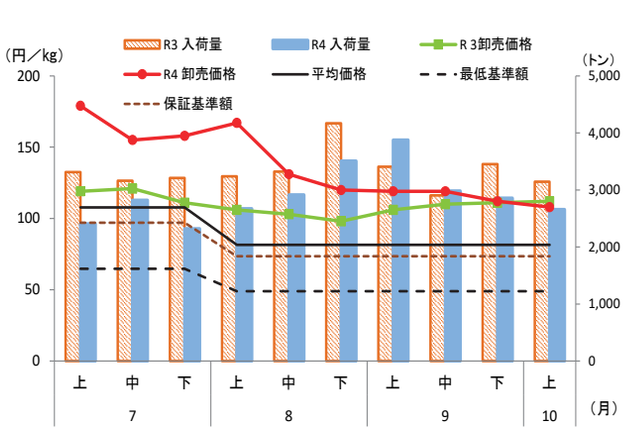


図５　たまねぎの入荷量と卸売価格の推移



資料：東京青果物情報センター「青果物流通旬報」

※１　卸売価格とは、東京都中央卸売市場の平均卸売価格で、平均価格、保証基準額および最低基準額とは、関東ブロックにおける価格である。

※２　平均価格とは、指定野菜価格安定対策事業（以下「事業」という）における、過去6カ年の卸売市場を平均した価格を基に物価指数等を加味した価格である。

※３　事業における価格差補給交付金は、平均販売価額（出荷された野菜の旬別およびブロック別の平均価額）を下回った場合に交付されるため、上記の各表で卸売価格が保証基準額を下回ったからといって、交付されるとは限らない。

表２　品目別入荷量・価格の動向（東京都中央卸売市場）

類別	品目	9月の入荷量・価格の動向
根菜類	だいこん	北海道産を中心に青森産の入荷があった。北海道産の作付面積は前年並みから一部産地で減り、降雨による生育遅延や品質低下で歩留まりが低下している。青森産の作付けは前年並みで、8月の大雨の影響で防除が徹底できず、今後の収穫分の播種に遅れや流れてしまったものが生じている。軟腐病も多い。総入荷は少なかった前年を1割近く下回り、平年を2割近く下回った。 価格は入荷減から堅調に推移し、前年を3割以上上回り、平年を4割近く上回った。
	にんじん	北海道産中心の入荷となった。作付けは前年並みから一部産地で減り、8月の大雨の影響で収穫遅れや品質低下が見られて産地間格差もあるが、M、Sサイズ中心のものが多い。総入荷はやや多かった前年を2割強下回り、前年をかなり大きく下回った。 価格は不足感から月間を通して堅調な動きとなり、安めに推移した前年を9割近く上回り、平年を7割以上上回った。
葉茎菜類	はくさい	長野産中心の入荷となった。作付面積は前年並みで、高温・干ばつの影響による生育遅延から、7月以降の適度な降雨で回復し、生育は順調で数量も十分であった。総入荷量は少なかった前年を1割以上上回り、平年をわずかに下回った。 品ぞろえの変化に連れて下旬に向けて価格を徐々に上げたものの、需要はまだ鈍く、大幅に高めに推移した前年を4割以上下回り、平年を2割以上下回った。
	キャベツ類	群馬産中心の入荷となった。作付面積は前年並みで、コロナ禍での労働力不足も解消され、一部で天候不順による湿害が散見されるものの、生育は順調。総入荷量は前年をやや上回り、平年をかなりの程度上回った。 潤沢な入荷から価格の動きは鈍く、下旬に向けやや上昇したものの、高めに推移した前年を3割以上下回り、平年を2割以上下回った。
	ほうれんそう	群馬産、栃木産を中心に関東産の入荷があった。各産地とも作付面積は前年並み。関東産高冷地はピークを越え、曇雨天と低温による生育遅延から回復傾向にあったものの、出荷にはばらつきがあった。病虫害の発生は少ない。露地作は高温や大雨の影響で全体に遅れが目立つ。総入荷量はやや多かった前年をわずかに上回り、平年をやや上回った。 価格は、下旬に関東平坦地産の出荷開始とともに落ち着きを見せ、前年をやや下回り、平年をわずかに下回った。
	ねぎ	秋田産を中心に、青森産、北海道産などの入荷があった。秋田産の作付面積は前年を上回る。6月以降の低温・干ばつによる遅れに加え、8月の大雨による水害で軟腐病などの病害が多発。青森産の作付面積は前年並みで、全体に細物傾向。8月の大雨の影響で防除ができず病害が多発していることや、腐敗からの廃棄も多い。北海道産の作付けは前年並みで、生育は順調に推移していたが、一部の産地で大雨の影響による品質低下がみられた。総入荷量は前年、平年をわずかに上回った。 価格は豪雨の影響による正品率の低下に加え、給食や業務用需要が回復したことから、安めに推移した前年を2割近く上回り、平年を1割程度上回った。
	レタス類	長野産中心の入荷となった。作付面積は前年並みで、高温・干ばつの影響による生育停滞から、その後の適度な降雨で生育は回復した。高冷地産の出荷が落ち着き、準高冷地産が増加。病害の発生は落ち着いている。総入荷量は少なかった前年を3割近く上回り、平年をやや上回った。 価格は大幅に高めに推移した前年を3割以上下回り、平年をやや上回った。

果菜類	きゅうり 	福島産を中心に群馬産、埼玉産など関東産の入荷となった。福島産の作付面積は前年並みで、夏秋作は変形果の発生が散見されているものの、草勢は維持されている。ただし病虫害の発生が平年より多く見られた。群馬産の作付面積も前年並みで、9月上旬の曇天の影響による肥大遅れがみられるものの、おおむね順調。埼玉産の作付面積も前年並みで、曇天が多いが猛暑日が少ないため生育はやや進んでおり順調。総入荷量は少なかった前年を1割以上上回り、平年をわずかに下回った。 価格は高めに推移した前年を2割以上下回り、平年をやや下回った。
	なす 	群馬産を中心に栃木産など関東産中心の入荷となった。群馬産の作付面積は前年並みで、初期成育時の遅れから、気温の上昇によって回復し、着果量も多く順調。虫害の発生がやや多かった。栃木産の作付けは一部前年をやや下回り、7月上旬の高温による生育前進がみられ、一部花落ちが散見されたがおおむね順調。総入荷量は少なかった前年を2割以上上回り、平年を1割近く上回った。 関東産のピークを過ぎて減少に向かう月後半に価格を上げたものの、高めに推移した前年を3割近く下回り、平年を2割以上下回った。
	トマト 	北海道産を中心に福島産、千葉産などの入荷があった。北海道産の作付面積は前年並みで、生育はおおむね順調であるが一部地域で落花や尻腐れが散見された。福島産の作付面積は前年並みで、7月上旬の高温や8月の日照不足の影響で一部草勢が低下し、花落ちの発生が散見され肥大も悪い。病虫害の発生も例年より多い。千葉産の作付面積は前年並みで、高温の影響により一部着果不良がみられるものの、おおむね順調。総入荷量は少なかった前年をかなりの程度上回り、平年をやや下回った。 価格は東北産の減少に伴い下旬に上昇し、高めに推移した前年をやや下回り、平年をやや上回った。
	ピーマン 	岩手産を中心に茨城産の入荷があった。岩手産の作付面積は前年並みで、8月中の日照不足の影響により生育が停滞しており、斑紋病、斑紋細菌病が多発している。茨城産の作付面積は前年をやや下回り、秋作の生育は順調。総入荷量は多かった前年を1割弱上回り、平年を2割近く上回った。 価格はやや高めに推移した前年を2割弱下回り、平年を2割近く下回った。
土物類	さといも 	千葉産を中心に埼玉産の入荷があった。千葉産の作付面積は前年並みで、春先の低温による初期成育の遅延は平年並みに回復し、病害の発生も少ない。埼玉産の作付面積は前年並みで、8月の適度な降雨と気温も概して平年より高かったことにより生育はおおむね順調。中国産の輸入は前年を3割以上下回った。総入荷量は前年、平年ともかなり大きく下回った。 価格はやや安めに推移した前年をやや上回り、平年をやや上回った。
	ばれいしょ 	北海道産中心の入荷となった。作付面積は前年並みで、低温・干ばつ傾向から、8月に入ってからの豪雨の影響により特に道南地区は掘り取りも遅れ、品質、数量ともに低下。地域差もあるが玉数は多く小玉傾向。総入荷量は少なかった前年をかなりの程度下回り、平年を2割近く下回った。 価格は大幅に高めに推移した前年を3割近く下回り、平年を1割強上回った。
	たまねぎ 	北海道産中心の入荷となった。作付けは前年並みで、8月の大雨の影響を受けた地域はあるものの、道東では大きな影響はなく肥大は十分でL大中心。中国産の輸入は前年を4割以上下回っているものの、ニュージーランド産が大幅に増加。総入荷量は前年をわずかに下回り、平年並みとなった。 価格は1カ月を通して堅調な動きが続き、やや高めに推移した前年をかなりの程度上回り、平年を3割近く上回った。

（執筆者：東京シティ青果株式会社　平田　実）

（3）大阪市中央卸売市場

９月の大阪市中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は４万113トン、前年同月比106.2%、価格は１キログラム当たり241円、同93.1%となった（表３）。

品目別の詳細については表４の通り。

表３　大阪市中央卸売市場の動向（９月速報）

品　目	入荷量（t）	前年比（%）	平年比（%）	価格（円/kg）	前年比（%）	平年比（%）	価格（円/kg）の推移		
							上旬	中旬	下旬
野菜総量	40,113	106.2	99.4	241	93.1	102.1	239	243	242
だいこん	2,823	87.7	76.2	142	129.1	141.4	144	136	146
にんじん	2,518	85.6	91.2	203	201.0	177.0	220	214	173
はくさい	4,807	128.2	117.1	84	59.2	76.7	71	84	94
キャベツ類	6,564	112.8	111.9	72	69.2	74.0	65	66	86
ほうれんそう	311	91.1	92.7	919	103.5	103.8	946	911	898
ねぎ	855	94.1	97.6	481	106.4	99.3	469	461	512
レタス類	1,761	136.3	81.6	215	70.3	115.9	186	247	220
きゅうり	1,710	113.2	109.0	314	84.0	87.8	352	289	297
なす	833	124.8	119.5	287	71.6	82.7	264	270	341
トマト	2,163	102.9	104.5	476	91.0	99.7	458	461	525
ピーマン	662	111.5	109.0	394	92.3	91.3	393	401	389
さといも	119	79.6	82.8	328	101.2	100.3	361	320	312
ばれいしょ	2,812	104.3	97.5	127	75.6	112.4	147	120	111
たまねぎ	4,110	101.5	91.2	132	113.8	140.5	135	134	128

資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」
注１：平年比は過去5カ年平均との比較。
注２：大阪本場および大阪東部市場のデータである。

表４　品目別入荷量・価格の動向（大阪市中央卸売市場）

類別	品目	9月の入荷量・価格の動向
根菜類	だいこん	北海道産と青森産が主体となり、岐阜産の入荷もあった。前月の長雨による生育不良などの影響が残り、気温高もあって品質も安定せず、産地出荷量が少なく各産地とも旬を追うごとに入荷減量の傾向となった。特に北海道産は上中旬の入荷量が前年を大幅に下回り、月間でも前年をかなり下回った。全体でも前年をかなり大きく下回り、平年を大幅に下回った。 絶対量の不足感から全旬とも高値での推移となったが、高過ぎたことにより販売には苦戦した。月間全体では前年、平年とも大幅に上回った。
	にんじん	北海道産の入荷があった。前月の降雨の被害を受けたところが多く、品質劣化により産地出荷量が少なく、入荷減量傾向となった。旬を追うごとに回復傾向ではあったが、入荷量自体は作の終盤に向かって減量傾向となった。月間では前年をかなり大きく下回る入荷量で、平年をかなりの程度下回った。 絶対量不足から単価は極端な高値推移となり、月間では前年の2倍の価格となり、平年を8割程度上回った。
葉茎菜類	はくさい	長野産を中心とする入荷であった。上旬は干ばつの影響で入荷量が伸び悩んだが、中旬以降は徐々に回復傾向となり下旬には入荷増量となった。月間では前年、平年とも大幅に上回った。 日中は真夏日となる日もあり暑い日が続いたが、朝晩の気温は下がり量販店でも徐々に荷動きが活発となった。価格は旬を追うごとに上昇傾向となったが、長らく続いていた安値の影響から月間では前年、平年とも大幅に下回った。

	キャベツ類 	群馬産を中心として主力の長野産の入荷となった。両産地とも作は終盤へと向かう中で入荷減量傾向となったが、気温高の影響で下旬に大玉の比率が増加し、入荷増量となった。月間でも前年、平年ともかなり大きく上回った。 価格は安定した入荷量の中で全旬を通して安値推移となった。旬を追うごとに上伸傾向であったが、月間では前年、平年とも大幅に下回った。
	ほうれんそう 	主力の岐阜産を中心に、夏産地の北海道産や長野産の入荷などがあった。各産地とも全旬を通じて気温高が続き、生育不良から産地出荷量が少なく、入荷量も伸び悩んだ。岐阜産は中旬には台風の影響もあり入荷激減となり、月間でも前年をかなり下回る入荷量であった。全体でも中旬の入荷量が少なく、月間では前年、平年ともかなりの程度下回った。 不足感から単価は堅調に推移した。旬を追うごとに下落傾向であったが、月間では前年、平年ともやや上回った。
	ねぎ（白ねぎ） 	長野産を中心に北海道産や鳥取産の入荷があった。全国的な気温高が続き、天候も良く長野産は旬を追うごとに入荷増量、北海道産も中旬までは入荷量が多く、順調な入荷となった。鳥取産は中旬に台風の影響で入荷減量となったが、下旬には増量となり、全旬とも前年に比べ入荷量が多く月間でも前年を大きく上回った。全体では前年を若干下回り、平年をやや上回った。 単価は安定しており、日中は暑い中でも朝晩の気温が下がり始めたことから旬を追うごとに上昇傾向となり、月間では前年をやや上回った。
	ねぎ（青ねぎ） 	青ねぎは徳島産と香川産が主体となる入荷であった。中旬の台風が通過した影響が大きく、被害が出たところもあり入荷量は激減した。下旬にも影響が残り入荷量は回復せず、前年をかなり下回った。細ねぎは高知産を中心に大分産や静岡産の入荷であった。中旬の台風の影響で各産地とも入荷減量となり、特に静岡産は冠水被害により激減した。青ねぎ全体では前年を下回った。 絶対量不足から価格は旬を追うごとに上昇を続けた。入荷量は少ない中でも末端の需要は低く、荷動きも鈍く価格は伸び悩んだが、月間では平年並みであった。
	レタス類 	長野産が中心の入荷であった。天候が良く順調な出荷を続けた。作の終盤に向かう中で旬を追うごとに入荷減量となったが、月間では夏の大雨の影響で極端に少なかった前年を大幅に上回った。サニーレタスとリーフレタスも長野産が中心の入荷で、月間では前年をかなり上回った。レタス類全体でも少なかった前年を大幅に上回り、平年を大幅に下回った。 量販店での荷動きは悪く、単価は伸び悩んだが中旬以降は入荷減量に伴って上伸した。極端な品不足から高値であった前年を大幅に下回り、平年をかなり大きく上回った。
果菜類	きゅうり 	福島産を中心として群馬産や大阪産、長野産などの入荷があった。台風の影響が懸念される中でも被害はなく順調な出荷を続け、福島産と長野産は作の終盤へと向かう中で旬を追うごとに入荷減量となったが、福島産は全旬とも前年を大幅に上回った。群馬産は中旬の入荷量が伸び悩んだが下旬には増量となり、月間では前年を若干下回った。大阪産は出遅れにより上旬は入荷量が少なく、中旬以降回復するも月間では前年をかなり下回った。月間全体では前年をかなり大きく上回り、平年をかなりの程度上回った。 価格は入荷量が多い中で旬を追うごとに下降傾向となり、各産地とも安値推移が続いた。月間では前年を大幅に下回り、平年をかなり大きく下回った。
	なす 	千両茄子は京都産、奈良産、高知産、群馬産などを主体とした入荷であった。長茄子は愛媛産を中心とした入荷であった。中旬に台風が通過した影響で四国産地を中心に出荷量が減少したが、回復は早く、それほどの入荷減とはならなかった。旬を追うごとに入荷減量傾向ではあったものの、月間では前年、平年とも大幅に上回った。 低迷していた安値の影響が残り、降雨や気温高での品質低下もあって価格は伸び悩んだ。入荷減量に伴って旬を追うごとに上伸したが、月間では前年、平年とも大幅に下回った。
	トマト 	岐阜産を中心に岡山産、千葉産、熊本産などの入荷があった。各産地とも作が終盤へ向かう中でも比較的安定した入荷が続いた。全体でも旬を追うごとに入荷減量傾向であったが、月間全体では前年をわずかに上回り、平年をやや上回った。 価格は入荷量が多い中で前年を下回ったが、安定価格で旬を追うごとに上昇傾向となった。月間では前年をかなりの程度下回り、平年並みであった。

	ピーマン 	長野産と愛媛産が主体となり、茨城産や東北産地などの入荷もあった。全国的に気温高でおおむね天候も良く、台風の影響もほとんどなく順調な入荷が続いた。夏産地は作の終盤で旬を追うごとに入荷減量となったが、月間では前年をかなり大きく上回り、平年をかなりの程度上回った。 順調な入荷が続いたことで価格は伸び悩んだ。前年、平年ともかなりの程度下回った。
土物類	さといも 	愛媛産が中心となる入荷であった。宮崎産が上旬で切り上り、9月6日以降は愛媛産の女早生が主体となって順調な出荷がスタートしたが、気温高の影響もあって量販店などの売れ行きは悪く、積極的な集荷とならずに下旬には入荷減量となった。輸入の中国産の入荷もあったが量は少なかった。月間では前年、平年とも大幅に下回った。 価格も入荷増量と引合いが弱いことから旬を追うごとに下落したが、月間では前年をわずかに上回り、平年並みとなった。
	ばれいしょ 	丸芋は北海道産を中心とする入荷であった。前月の長雨の影響で品質低下が目立ち、中旬にも断続的な降雨の影響があって産地出荷量は減少した。気温が高いため売れ行きも悪く、量販店などの発注量も少なかったため入荷量は少なかった。メークインも北海道産が中心となる入荷であった。前月の降雨の影響で掘り取りが遅れたが、その分が9月に入ってからまとまって出荷された。月間全体では前年をやや上回り、平年をわずかに下回った。 入荷量が伸び悩む中でも価格は安値推移が続いた。量販店からの引き合いは弱く、入荷増量に伴って旬を追うごとに下落した。月間では前年を大幅に下回り、平年をかなり大きく上回った。
	たまねぎ 	北海道産を中心に兵庫産の入荷があった。北海道産が前月の大雨の影響で被害を受けたところがあり、中旬にも台風の影響などで断続的な降雨があり、収穫作業が遅れるなどで出荷が遅れたため入荷量は伸び悩んだ。兵庫産は産地残量が少ない中で旬を追うごとに減量となり、月間では前年の半分以下の入荷であった。月間全体では、前年をわずかに上回り、平年をかなりの程度下回った。 価格は前月まで高値が続いていたが、入荷量が増えない中で不足感から高値推移のままとなった。月間では前年をかなり大きく上回り、平年を大幅に上回った。

（執筆者：東果大阪株式会社　新開　茂樹）

（4）首都圏の需要を中心とした11月の見通し

秋冬野菜の播種（はしゅ）時期に台風の襲来があったが、心配されたハウスの倒壊といった被害はなく、関東の露地野菜産地も大幅な定植のやり直しといった報告はなかった。九州のにんじんやだいこん、ブロッコリーなどの露地野菜については、大雨で流されるなどの被害があり、急ぎまき直している物もある。そのため年内出荷は半減や皆無に近いといった報告もあった。ただ、市場出荷よりも契約物が多く、その不足分を賄うため市場への注文が増えて、西日本の市場の価格が高くなる展開が予想される。

ここ数年、11月は重量野菜の価格低迷の印象が強く、全般的に出荷を後ろにずらす意向がみられる。輸入に注力してきた青果卸が国内産地からの仕入れを強化する動きもみられ、市場価格は平年を上回る推移が予想される。

根菜類

だいこんは、神奈川産が11月上旬から例年並のスタートになると予想される。生育は順調で作付けは平年並、12月中旬のピークに向けて増えながら推移すると予想される。千葉産（ちばみどり）は10月上旬から始まってきたが、作付けの前倒しもあり、やや前進傾向である。11月から年明けまでピークは続くと予想される。作付けは前年並である。同産（鎌ヶ谷）は10月下旬から例年並に始まるが、生育は順調でやや早まる可能性がある。秋だいこんは安値が続いており、作付けは減少傾向にある。播種後に台風の強風に遭ったが、傷

みの報告はない。ピークは11月上旬で11月下旬には切り上がると予想される。

にんじんは、千葉産（八街）は11月上旬から例年どおり始まる見込みで、９月下旬から10月にかけての好天で肥大は良好である。播種時期の大雨で種が流され、作付けは例年の90%程度と予想している。その後の台風による影響はほとんどない。埼玉産は10月末頃から例年どおりの販売開始と予想している。生育は順調で、作付面積は前年並である。12月のピークに向けて増えながら推移すると予想される。肥大は10月の天候次第であるが、低温が続くと抑えられるであろう。北海道産は今年は雨が多く、播種面積は計画の90%であったが、８月16日の豪雨で実割れや芯腐れが発生した。収穫量は計画の80%と不作年になった。切り上がりの時期は例年と変わらず11月の１週目、中心サイズはＬ・Ｍで例年どおりである。

葉茎菜類

キャベツは、愛知産が10月中下旬から始まり、11月に入って本格出荷になると予想される。台風15号による大きな被害はなく、一部坂下や窪地の園地はまき直ししたが、出荷に影響はない。来年３月まで出荷のピークが続き、４月にはいったん減って、５月に夏キャベツで再び増えると予想される。作付面積はほぼ前年並である。

神奈川産の定植作業は順調に行われており、11月には出荷が始まってくると予想している。作付けは前年並であり、当面11月から年明け２月までピークで、量的には前年並を予想している。千葉産は現在、出荷が始まり、10月20日頃に量的にまとまってくると予想され、当面は11月から12月にピークとなり、11月は前年並と予想している。茨城産は現在出荷が始まり、本格出荷は10月20日以降と予想される。中心サイズはＬで、極端な大玉にはならないであろう。作付けは例年並で、12月中旬で切り上がると予想される。

はくさいは、茨城産（北つくば）は例年通り10月20日前後から始まると予想される。11月20日過ぎから本格的に増えてきて、自然災害の影響はなく生育順調である。同産（常総ひかり八千代）の現状は例年と同様に始まっており、自然災害の影響はなく、定植は順調に行われた。作付けは前年並で、当面の出荷のピークは10月末ごろから11月と予想している。12月には春野菜の作業でいったん少なくなると予想している。長野産は10月いっぱいがピークで、11月２週目から減ってきて下旬まで出荷できると予想される。現状は前進傾向であるが、気温が下がれば10月下旬物の出荷が多くなると予想される。

ほうれんそうは、群馬産はハウスと露地の出荷となるが、生育は順調である。当面のピークは10月中旬で11月には寒さからやや減ってくると予想している。岩手産は生育順調で、現状は出荷が減り始めているが、11月20日頃までまとまった量が出荷できると予想している。

ねぎは、青森産は８月の豪雨の被害があり、出荷は例年の70%程度と減少している。今後も回復は期待できず、11月いっぱいまで同程度の出荷と予想している。埼玉産の現状は夏ねぎの出荷となっている。大きな自然災害の影響はないが、例年より虫の害が多く見られている。10月後半はブロッコリーに注力するため減るが、11月に入って秋冬物となり、再び増えると予想される。作付けは前年並で、ピークは11月下旬から12月初め頃と予想している。千葉産は９月１日から秋冬物に切り換わったが、自然災害の影響もなく順調である。本格的に増えるのは11月中旬からで、年明けが最大のピークである。作付けは高齢化の影響で若干前年を下回っている。

レタスは、香川産は前年よりやや遅く、10月10日前頃から始まると予想される。台風による直接の被害はないが、大雨の影響で遅れた圃場も一部ある。年内出荷については前年を下回ると予想される。作付けは、資材の高騰により止める農家もいるため前年の90%と減少している。兵庫産は現状始まったところであるが、前年よりやや遅く平年並である。当面のピークは12月で徐々に増えながら推移すると予想され、作付けは前年を若干下回っている。茨城産はスタートが早く現状１回目

のピークとなっている。気温が高めで降雨も多かった影響で前進傾向となっている。11月いっぱい例年どおり出荷できるが、量的にまとまるのは20日頃までで、今シーズンの価格安で、早めに切り上げる農家がいると予想している。

果菜類

きゅうりは、埼玉産は安定した天候により10月に入り前倒し気味に増えている。10月中旬にやや減るが、11月には加温物となって量的には平年並に安定してくると予想される。作付けは前年並で、量的にも前年並を予想している。千葉産は現状の夏秋物は終盤を迎え、９月１日定植の冬春物が10月中旬から始まると予想される。生育は順調であり、作付けは例年と変わらず、11月中下旬に本格化して12月から翌１月が最大のピークと予想している。宮崎産の台風の被害は、一部のハウスが破れたりしたが甚大でなく問題ない。現状は定植のピークである。出荷は平年並に10月下旬から11月上旬に出揃ってきて、11月中下旬にピークと予想される。作付けは前年並である。

なすは、高知産の現状は８月に定植した物が増えてきている。天候の安定により生育順調で、10月に１度ピークが来る可能性もあるが、例年通りであれば、11月にピークが来るであろう。12月には気温が下がって数量はいったん減少すると予想される。作付けは前年並である。福岡産は例年と同様に10月３日から始まり、台風によるハウスが倒壊するなどの被害はなかった。現状の生育は順調で、当面のピークは11月で、12月は寒さからやや減少すると予想される。作付けは微減であるが、出荷は例年並を予想している。

トマトは、熊本産は台風の影響もなく、ほぼ例年並の出荷となっている。出荷のピークは当面11月下旬と予想している。作付けはミニトマトが増えて、大玉が減っている。愛知産の現状は降雨が多く、日中の高温もあって着果不良となっている。この影響により10月下旬から11月初め頃に数量が伸び悩むと予想される。作付けは前年並である。福岡産は11月に入り本格的に増えてくると予想される。現状は定植作業も続いている。大玉が減って「フルティカ」などの中玉が増えている。トマト全体では３～５％作付けが減少している。

ピーマンは、茨城産の現状は秋ピーマンの出荷となっており、生育順調で、11月も平年並で12月に入り減ってくると予想される。ハウスの越冬物は現状定植が終わったところであるが、面積は昨年を下回っている。10月下旬から出荷が始まり、11月には増えながら推移すると予想される。11月は面積減の影響で昨年を下回ると予想している。岩手産の本年度は天候不順による不作で、実績としては80％作であった。切り上がりも例年より早く11月上旬と予想している。福島産の今年は作柄として天候に恵まれ豊作であった。11月は終盤だが、ほとんどが露地であるため、霜が降りると切り上がるであろう。11月10日頃まで出荷できると予想している。

土物類

さといもは、埼玉産の現状は例年より小ぶりの仕上がりとなっている。後期肥大も期待できるため例年並まで回復の可能性もある。10月に入って本格出荷が始まり、当面は11月上旬にピークになると予想している。作付けは前年並で、量的にも前年並を予想している。

ばれいしょは、北海道産（道央ようてい）は男爵の出荷となり、作柄は平年並を予想している。大きさはＬサイズ中心で、小玉に仕上がった前年より肥大が良く平年並の仕上がりを予想している。10月から年明けの３月まで計画的に出荷していく。同産（十勝芽室）のメークインは収穫を終えて、現状出荷のピークを迎えている。今年は玉数が多く、やや小ぶりの仕上がりになっているが、大きさについては問題なく、総じて平年作である。長崎産のニシユタカは例年と同様に12月に入ってから本格化すると予想される。台風で若干遅れたが減収はない。作付けは例年並である。

たまねぎは、北海道産の現状は収穫作業を80～90％程度終了したところであるが、平年並の状況である。サイズもＬ大が中心と予

想される。現状も出荷のピークではあるが、年明け５月まで計画出荷していく。

その他

ブロッコリーは、福島産の出荷のピークは10月中下旬で、11月には減りながら推移すると予想される。作付けは年々減少傾向にある。埼玉産は９月下旬から例年並に始まったが、今年は病気の発生が例年より少なく順調である。11月にピークを迎え、12月には減ってくると予想される。作付けは例年並である。長野産のピークは９月下旬に来て10 ～ 11月は減少してくるが、11月いっぱいは例年並に出荷できると予想している。

かぼちゃは、北海道産の現状は入庫がまだ続いており、豊作傾向のため、作付けは前年を下回っているが収穫量は前年並かやや多いと予想している。出荷は10月がピークで11 ～ 12月と徐々に減りながら推移すると予想される。品種は「くりゆたか」「栗将軍」などである。

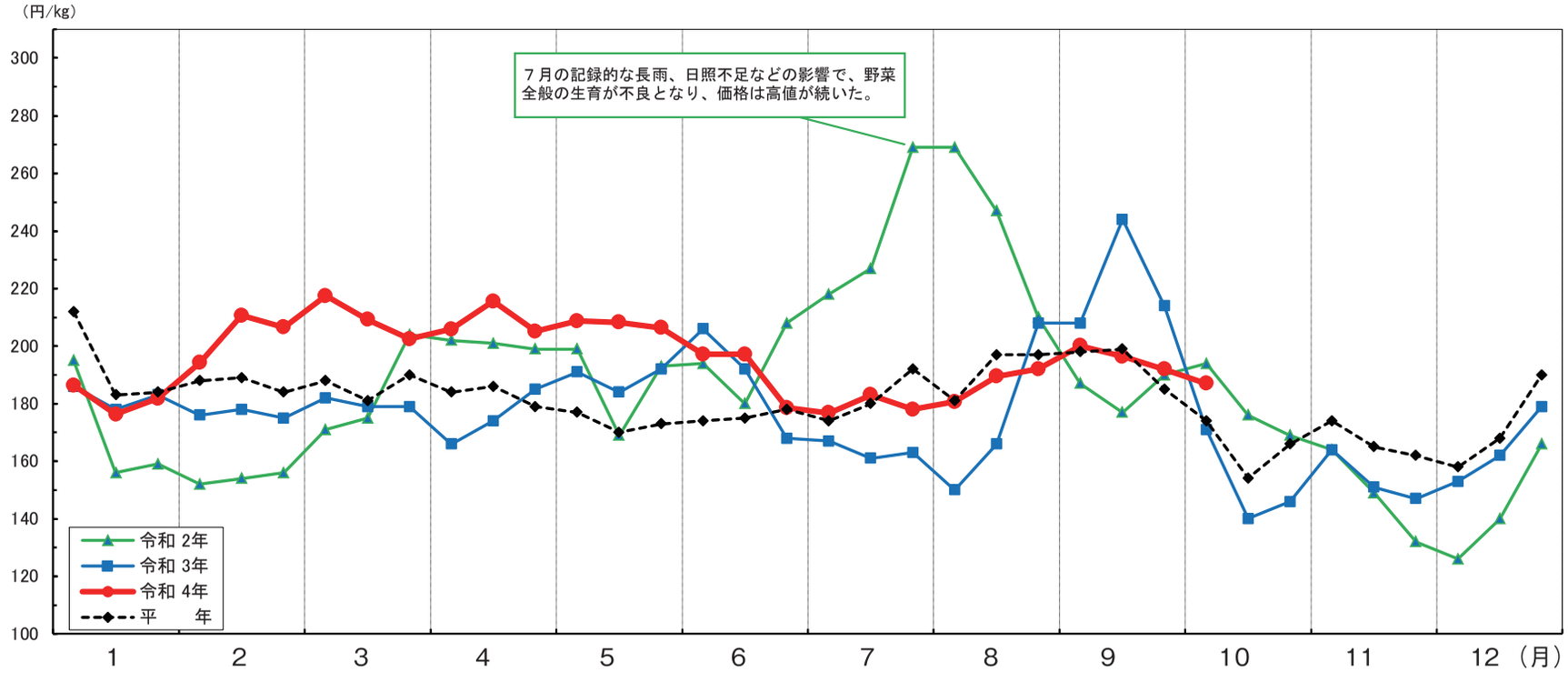
ごぼうは、青森産の掘り採りは９月に入り始まった。８月の豪雨の影響で20%程度減少する圃場（ほじょう）もある。中心サイズはＬ・Ｍと予想される。収量は平年を下回ると予想している。

かんしょは、千葉産は当面は「ベニアズマ」と「シルクスイート」の出荷となり、現状は平年よりやや多いと予想している。中心サイズはＬと肥大も問題ない。徳島産の現状は90%程度収穫が終わったところであり、平年並で少なった前年を上回ると予想される。自然災害がなく、順調に仕上がった。出荷は今後増えて11月がピークと予想され、12月から翌１月はやや減ってくると予想される。

ながいもは、青森産の掘り採り開始は11月10日からで、出荷は20日頃からと予想される。圃場によっては、豪雨による水害で品質低下も懸念される。順調に仕上がった圃場では太さも問題なく、全体では平年作が予想される。

（執筆者：千葉県立農業大学校
講師　加藤　宏一）

（参考）　指定野菜の卸売価格の推移（東京都中央卸売市場）

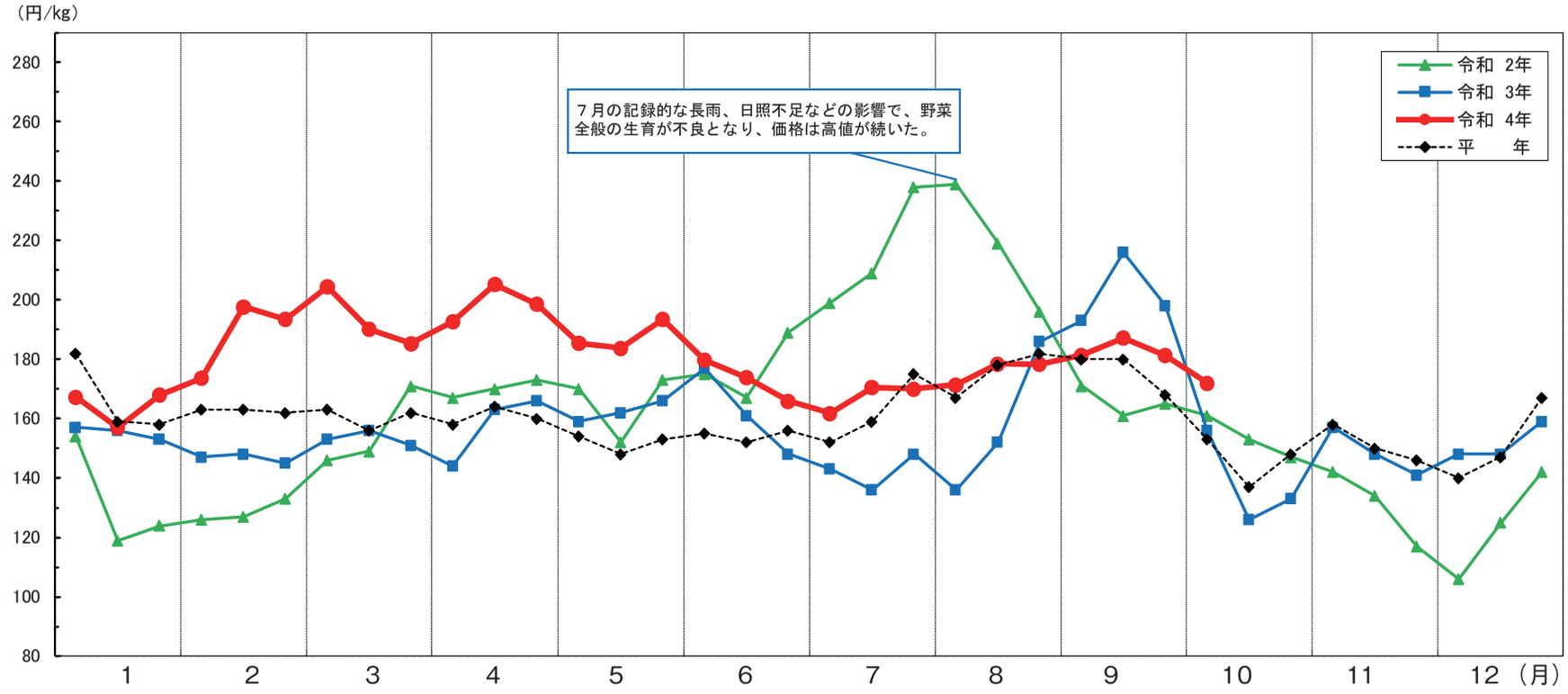


（単位：円／kg）

	1月			2月			3月			4月			5月			6月			7月			8月			9月			10月			11月			12月		
	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬
令和2年	195	156	159	152	154	156	171	175	204	202	201	199	199	169	193	194	180	208	218	227	269	269	247	210	187	177	190	194	176	169	164	149	132	126	140	166
令和3年	186	178	183	176	178	175	182	179	179	166	174	185	191	184	192	206	192	168	167	161	163	150	166	208	208	244	214	171	140	146	164	151	147	153	162	179
令和4年	186	176	182	194	211	207	217	209	202	206	216	205	209	208	206	197	197	179	177	183	178	181	189	192	200	196	192	187								
平　年	212	183	184	188	189	184	188	181	190	184	186	179	177	170	173	174	175	178	174	180	192	181	197	197	198	199	185	174	154	166	174	165	162	158	168	190

資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」
注１：平年とは、過去５カ年（平成29年～令和３年）の旬別価格の平均値である。
注２：豊洲市場、大田市場、豊島市場、淀橋市場の４市場のデータである。

（参考）　指定野菜の卸売価格の推移（大阪市中央卸売市場）



（単位：円／kg）

	1月			2月			3月			4月			5月			6月			7月			8月			9月			10月			11月			12月		
	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬
令和２年	154	119	124	126	127	133	146	149	171	167	170	173	170	152	173	175	167	189	199	209	238	239	219	196	171	161	165	161	153	147	142	134	117	106	125	142
令和3年	157	156	153	147	148	145	153	156	151	144	163	166	159	162	166	177	161	148	143	136	148	136	152	186	193	216	198	156	126	133	157	148	141	148	148	159
令和4年	167	157	168	174	198	193	204	190	185	193	205	199	185	184	193	180	174	166	162	170	170	171	178	178	181	187	181	172								
平　　年	182	159	158	163	163	162	163	156	162	158	164	160	154	148	153	155	152	156	152	159	175	167	178	182	180	180	168	153	137	148	158	150	146	140	147	167

資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」
注１：平年とは、過去５カ年（平成29年～令和３年）の旬別価格の平均値である。
注２：大阪本場および大阪東部市場のデータである。